長崎だより

長崎の情報をお届けします

FFG調査月報の姉妹誌「ながさき経済」を発刊している、ふくおかフィナンシャルグループの長崎経済研究所。長崎の旬な情報を提供するコーナー「長崎だより」の今月号は、景色デザイン室 代表 古庄悠泰様に「デザインの視点が町に生かされる時～雲仙市小浜町での活動を中心に～」と題し、寄稿していただきました。

長崎経済研究所による「ながさき経済web」随時更新中!

当研究所が発信する最新の情報をメールでお届けします。
メールマガジンの登録はこちら▶

ながさき経済web画面

お問い合わせ

株式会社長崎経済研究所
長崎市銅座町1番11号
十八親和銀行本店内
TEL095-828-8859

長崎経済研究所とは

長崎県の経済・社会・産業動向などに関する調査研究及び企業経営や県民の生活のお役に立つ情報をご提供するとともに、各種経済・文化団体の事務局活動等を通じて、地域社会に貢献することを目指しております。

デザインの視点が町に生かされる時

～雲仙市小浜町での活動を中心に～

寄稿　古庄 悠泰

小浜温泉街

小浜移住のきっかけ

「どうして小浜に?」。私が福岡から雲仙市小浜町に移住したことを知った方は、まずその質問を私に投げかけます。その答えは「追いかけた先がたまたま小浜だったから」。

福岡で生まれ育ち、大学でプロダクトデザインの勉強をしていた私は、授業のゲスト講師として来られていた小浜出身・在住のデザイナー城谷耕生さん(studio shirotani)の話に感銘を受けます。プロダクト(工業製品)＝大量生産・大量消費を前提とする世界の中でのデザインの仕事にどこか迷いがあった私にとって、生活の根本から考え抜かれた城谷さんのデザインと活動の実践は本当に衝撃的でした。そして「今すぐこの人から学びたい」という一心でゼミの先生から城谷さんの連絡先を教えてもらい、バスに揺られて追いかけた先が小浜だったのです。

それからは、今まで行ったことも(もしかしたら聞いたことも)なかった小浜に通う日々が3年生の頃から始まり、大学を卒業してすぐに修行のつもりで城谷さんの事務所の門を叩きました。「新卒」で同級生のほとんどが大手メーカーなど少なくとも福岡以上の都心部に向かう中、福岡よりさらに田舎に就職

Profile

景色デザイン室
代表　古庄(ふるしょう) 悠泰(ゆうだい)

1989年　福岡県糸島市生まれ
2009年　九州大学芸術工学部 工業設計学科入学
2013年～　studio shirotani入社、刈水庵店長兼任
2016年～　景色デザイン室代表
2017年　景色喫茶室オープン

したのは当時クラスでたった一人、自分だけでした。

刈水庵の立ち上げ

城谷さんのもとで働き始めて最初に任された仕事が、studio shirotaniの新たな活動としてオープンしたショップ・カフェ「刈水庵（かりみずあん）」の立ち上げです。このお店は小浜温泉街から歩いて10分程のところにある「刈水」という地区にあります。温泉街からほど近くながら車が入らない急な斜面沿いのこの地区は、空き家だけでも約　40％（当時）のいわゆる「限界集落」。こんな場所にショップカフェをオープンさせるのは無謀に思われるかもしれませんが、もちろん思いつきで始めたわけではありません。オープンから遡ること約1年、studio shirotaniと長崎大学が共同であるワークショップを企画しました。

それは「過疎地域を様々な面から調査し、デザインの力で地域を活性化するアイデアを提案する」というもので、その地区として選定されたのが刈水地区だったのです。このワークショップには九州大学、佐賀大学、長崎大学などから建築デザインや地域経済を学ぶ学生が集められ、実は当時大学4年生の私もこのワークショップに参加していました。ワークショップ期間中、学生たちは小浜に合宿し、昼は地区調査、夜はそれを踏まえたアイデア考案という濃密な約1週間。その成果物として「1：北刈水地区調査」「2：北刈水エコヴィレッジ構想」という2つの冊子を制作し、地域住民の皆さんや長崎大学の教授の皆さんの前で発表しました。当時このワークショップはこの「発表」がゴールの予定でしたが、発表を聞いた地域住民の方々に「この提案を実現しよう！」とまさかの後押しをいただき、それからすぐ刈水地区内の立派な空き家を借りることができました。この空き家が、後の刈水庵です。

オープンしてからは私はスタジオアシスタント兼刈水庵の店長として、ショップとキッチンとデスクを行き来するという「新米デザイナー」としてはややユニークな日々の中で、様々な出会いと経験を得ていくことになります。「車の入らない急斜面沿い」という立地を生かし、窓を開け放っても雑音が全く聞こえず気持ちのいい風が通るカフェ、そして「こんな所にこんな物が」と誰もが驚く世界中のデザイン雑貨（しかもかなりマニアック）が集まったカフェ兼ショップがオープン間も無く反響を呼び、これまで地域住民以外は新聞配達員さんと郵便局員さんくらいしか入ることのなかった刈水地区に、県内外からお客様が来られるようになりました。もちろんそれも嬉しかったのですが、「最近はよう人の通るけん、綺麗にしとかんばね」と刈水庵のすぐ近くに一人暮らしをしているおばあちゃんが軒先にプランターの花を植えていた時は、本当に頭の下がる思いでした。地域の方々に支えられてこその、地域のお店です。

ショップ・喫茶「刈水庵」。築80年以上の古民家を改装

刈水デザインワークショップの様子と成果物の冊子

刈水デザインマーケット

そんな中、日々の営業からもう一歩ひらいた企画として「刈水デザインマーケット」というマルシェイベントを始めました。マルシェイベントでは広い土地に各出店ブースが立ち並ぶスタイルをよく見られると思いますが、刈水デザインマーケットでは空き地や空き家の軒先、また現在お住まいのお家の庭などを大家さんのご協力のもとお借りし、斜面沿いに県内外のシェフや作家が軒を連ねるという独特のスタイルが特徴です。

最初はスタッフの古着や刈水の住人のおじちゃん特製の「つるカゴ」などまさに手作りで小さく始めたイベントでしたが、約5年間で徐々に県内外の出店者も増え、最終回となる第15回では出店店舗約30、来場者数もこの狭い刈水地区に約1，000名がひしめき合う程にまで成長しました（15回目を最終回とし、このイベントは後述の「小浜

デザインマーケット」に引き継がれることになります）。出店内容のクオリティの管理、主催者と出店者での美意識の共有、広報物（チラシ、ポスター、写真、ＳＮＳなど）の作り込みなど、デザインの職能はデザインの仕事以外でも（あるいは以外でこそ）活かすことができます。また、それはお客様側から見ると「行ってみたい」「行って良かった」に繋げることができる、そう身をもって感じたイベントでした。

地方にこそデザインの仕事はある

studio shirotani・刈水庵での勤務に伴い、必然的に私も小浜に住んでいましたが、冒頭でも少し触れたように最初は「修行のつもりで」小浜に越して来ていました。デザインの経験をしっかり積んで、（今考えると何となくとしか言えませんが）地元の福岡で独立するつもりだったのです。しかし住んでいくうちにその気持ちは動いていきます。小浜の海、温泉、美味しい食べ物、そして何よりオープンマインドで明るくやわらかい小浜の方々の人柄に日々を重ねるほどに惹かれていき、またスタジオ時代で仕事の関係も小浜や島原半島内に広げることができたこともあり、「仕事の繋がりがない福岡に無理に戻るよりも、小浜で独立する方がとても自然な気がするな」と思うようになりました。

刈水デザインマーケットの様子。急な斜面沿いに所狭しと出店が並ぶ

そして２０１６年夏に「景色デザイン室」として独立開業。現在では小浜温泉街の徒歩20分圏内に約15社のクライアントから、継続的にデザインの仕事をさせて頂いています。年々小浜の地域と深く関わっていく中でよく耳にしたのが「今まで仕方なく手作りでやってたけど、（デザインを）頼めるなら頼みたい」という声です。特に個人店の方などは、名刺１枚から商品パッケージ、ウェブサイトに到るまで「デザインを発注する」ということをしたことがなく、「デザインにかかる費用もスケ

小浜温泉旅館「伊勢屋」のブランディングの仕事。ロゴマークから外装サイン、ツール類までデザイン。

ジュール感も分からない、デザイン業者との繋がりもない」という方がまだまだ多いということが分かりました。それが分かってからは、デザインの仕事のプロセスはどういったもので、どういうやり取り（打ち合わせ）が今後あるのか、どの作業にどのくらい費用がかかるのかなど、できるだけ細かく分かりやすくご説明してから仕事をさせていただくようになりました。色々な面でご理解いただくのに時間がかかることもありますが、その分「地方にこそデザインが求められている＝デザインの仕事がある」と感じています。

自分が欲しかったお店をつくる

独立してちょうど1年がたった頃でしょうか、小浜の行きつけの定食屋さんで食事をしていたときのこと。移住して以来いつもお世話になっているこの店のお母さんが「隣のあの建物が空くみたいよ。古庄くん、前この辺で物件探してなかった？」と声をかけてくれました。その建物はバスターミナルの真隣、元々「雲仙小浜商業協同組合」が入っていた3階建てのペンシルビル。組合の解散に伴い、解体に向けてスケジュールを組んでいるというのです。当時山手の小さな一軒家を自宅兼事務所として細々と仕事をしていた僕は、「壊すなんてもったいないですね、僕だったらこういう風に使うのに」と軽い気持ちで話したのをお母さんが組合に伝えてくれ、とんとん拍子にこの物件をお借りできることに。

その時お母さんに話した「こんな風に」というのは、全面ガラス張りになっている1・2階のつくり（当時全てブラインドで締め切られていた）を活かし、2階をデザイン事務所に、1階を地域にひらけた小さなコーヒースタンドにするというものでした。その理由は2つあります。1つ目は、もしここを自分の事務所にするとしたら、せっかくの立地なのに打ち合わせで来たクライアントしかこの場所の扉を開けられないのはもったいないということ。2つ目は、「自分がこんな店が欲しいと思っていたから」です。当時車を持っておらず長崎市などへの打ち合わせはバスで行っていた私は、バスに乗る前においしいコーヒーを飲みたいが飲食店に入る時間は無い、でも自販機のコーヒーで済ませたくもない、といつも思っていました。そんな時に、気軽に入れて美味しいコーヒーをテイクアウトできる店がバスターミナルの近くにあったら・・・それを誰も作らないなら自分でやってみよう、そう思ったのです。そんないわば「思いつき」で、改装後すぐに「景色喫茶室」をオープン。いざオープンしてみるとご近所のおばさまからバスターミナルに降り立った外国人観光客まで、様々な方々に立ち寄っていただけるようになりました。「この町には何もない」と嘆くのではなく「こんなモノゴトがあったらいいな」と想像してみることから全ては始まるのだと思います。

元・雲仙小浜商業協同組合の事務所だった物件を改装。
1階は週末オープンのコーヒースタンド「景色喫茶室」、2階がデザイン事務所「景色デザイン室」。

イベントを通して その町自体が好きになる

さて先述した「刈水デザインマーケット」は回数を重ねるごとに規模や来場者数が大きくなり、小さな刈水地区では若干手狭になってきていた一方で、私がオープンした景色喫茶室以外にも県内外から小浜に移住し温泉街に店を開く方々が徐々に増えつつありました。そこで、刈水庵や景色喫茶室を含めた5店舗の共同主催で、刈水デザインマーケットのフィールドを小浜温泉街に拡大した町歩きマルシェイベント＝「小浜デザインマーケット」を企画しました。

このマーケットの特徴は、一つの広い会場に出店者が集まるのではなく、主催の各店舗にそれぞれがオファーした出店者が出店するという点です。マーケットに遊びにきたお客さんは、各店舗でのマルシェを楽しむために必然的に温泉街を歩くことになります。これまで、ほっとふっと105（小浜で有名な「日本一長い足湯」）から飲食店へ、そこから旅館へとすべて「点」を車で繋いで移動していた方にとっては、イベントをきっかけに小浜をじっくり歩いてみることで点から線へ、そして面的に小浜温泉街の魅力を発見することに繋がり、温泉街自体も好きになってくれたらと願っています。「小浜デザインマーケット」は過去3回企画（3回目は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）。今後も定期的に続けていくことで、現在の5店舗だけでなく小浜全体を巻き込みながら成長させていけたらと考えています。

今後の展開

これまで小浜温泉街では様々な組合や団体、個人がそれぞれ独自の活動を行ってきました。個々の活動や思想が素晴らしいものだとしても、小浜全体で見たときに今後どういう町にしていきたいか、どんな未来を作っていきたいかという思いをなかなか共有できません。そこで、これからの小浜温泉の未来について「みんなで」考え、取り組んでいくまちづくり団体として、旅館関係者や地元商店、デザイナー、エネル

ギー経済研究者などのメンバーからなる一般社団法人「OBAMA ST・2030（小浜ストリート2030／以下OST2030）」を立ち上げました。

OST2030として最初に取り組んだことは、小浜の人々が「小浜の未来」についてどう考えているのかを聞いて回り、可視化し、それらを実現可能なプランにまとめ上げることです。具体的には、できるだけ本音に近い意見が出やすい顔なじみの小人数27グループ・総勢118人から集めた声と、そこから出てきた課題や要望をOST2030でまとめた12のプランを、「おばまのみらいのはじまり展」として商店街に展示して地域住民の皆さんに見てもらいました。そして現在、一つずつそれらを実行に移しており、プラン1として掲げていた「小浜歴史資料館」の再整備を進めています。

街の明るい未来は、ある日突然誰かが作ってくれるものではなく、いまここで暮らしている私たち自身が作るものです。今後もデザイナーとして、まちづくり団体として、そしてこの街に暮らす一人の住民として、小浜温泉街の未来をかたちにしていけたらと考えています。

小浜デザインマーケットの様子。温泉街の名店舗を回りながらこだわりの食と物を楽しむ

OBAMA ST・2030で開催した「おばまのみらいのはじまり展」